

トラン・ヴァン・トゥ教授早稲田大学教授外国人叙勲記念レセプション  
トラン・ヴァン・トゥ教授御挨拶文  
(2018年8月15日)

【呼びかけ】

梅田邦夫大使御夫妻、  
グエン・スアン・タン共産党中央委員・書記局委員、  
御列席の皆様、

【本文】

このような盛大で温かいレセプションを開催していただいた梅田邦夫大使をはじめとする在ベトナム日本国大使館の皆さまにお礼申し上げます。また、この機会に大勢のベトナムの友人、日本の友人にお会いできて嬉しく思います。お忙しいところ御出席下さり感謝しております。

この度、日本政府から瑞宝小綬章をいただきまして、身に余る光栄と存じます。梅田大使のご紹介で私のことが過分に評価されて、大変恐縮しております。これまで日本とベトナムとの関係の発展、あるいは日本の文化・歴史・社会・経済についてのベトナムでの理解の促進に関して、私が少しでも貢献できたなら、それは両国の多くの方々に協力して頂いたからであります。特に、在ベトナム日本大使館、在日ベトナム大使館の歴代大使とその他の方々、日本とベトナムの友人、研究・教育の仲間の協力にたいへん恵まれました。そのような方々は、本日この会場に多く見えておられます。皆さまの友情に改めて感謝しております。

さて、これまでの半世紀を振り返ってみると、私は人生のいろいろな節目に多くの好運に恵まれていました。ベトナム中部の貧しい村で育っていましたが、何とか高等学校を卒業でき、またサイゴン（現：ホーチミン市）で働きながら勉強し、将来、高校で文学の教員になることを目指していました。そんなある日、運命の日が来ました。たまたま自転車でサイゴン政権の文化教育省の前を通ったとき、日本政府が国費留学生を募集しているお知らせを見たのです。幸い、文化教育省の書類選考と面接、そして日本大使館での筆記試験の結果、夢にも見なかった日本留学ができました。そして、1968年4月に日本に来ました。そのとき、日本で大学を卒業したら、または大学院博士課程を修了したら、戦争も終わると期待していました。ベトナムに帰ったら戦後の経済復興の関係の仕事に就きたいと考えましたが、時勢に左右され、結局半世紀も日本に滞在しました。しかし、予期しておりませんでした。結果として良かったと思います。私はベトナム人としてベトナムを愛していますが、同時に第二の祖国になった日本も愛しており幸せだと思います。因みに、この会場にもいる私の妻もベトナム人ですが、日本を愛し、特に日本文学が好きで、多くの小説・伝記を翻訳し、ベトナムに紹介しております。

私はベトナムを離れた時、まだ19歳未満でした。戦争中でしたし、家庭の経済事情もあったので、当時、私の行動範囲は家と学校を中心とする狭い範囲に限られていました。また、勉強やアルバイトで忙しくて、ベトナムとはどのような国かあまり意識しませんでした。しかし、故郷を離れると、ベトナムに対する意識が強くなり、国の将来も考えるようになりました。チェ・ラン・ヴィエン(Che Lan Vien)という有名な詩人は次の詩があります。

住むときはただ住む場所しかなかった。  
離れるときはその土地が靈魂に昇華された。

この詩は私のその時の心境をよく表したと言えます。考えてみれば、故郷を離れたとき、ベトナムに関する心情、考え方は主として歴史、文学、音楽などから影響を受けたのです。その中で、長い歴史・統一的文化に対する民族的誇りは別として、私の脳裏に焼きついたことは、ベトナムが貧しい国で、戦争が早く終結し、貧困からの脱出に努力しなければならないということでした。当時の歌曲もベトナムの田園風景を称えながらも人々の生活の貧しさをも表現したものが多かったのです。小説もそうでした。

ところで、私は、1930年代に活躍した「自力文団」の作家たちの小説が好きでした。そのグループのリーダーであったニャット・リン(Nhat Linh)がある長編小説の主人公の言葉として「愛国とは何か」を述べましたが、私にとって非常に適切で重要な愛国の定義で、今までずっとそのように考えてきました。つまり、

「国家を表現するのは王様でもなく、有名人でもない。普通の国民である。このため、愛国とは普通の人たちを愛し、苦しい生活に強いられている普通の国民のことを考えることである」。

国が発展して、国民の生活水準が大きく向上されるまでその愛国の定義が当てはまると考えたのです。

さて、私が留学で来日した1968年は日本では明治維新から100年という区切りの年であることは別として2つの大きな出来事がありました。2つとも私にとっても大きな意義がありました。1つは川端康成が日本人として初めてノーベル文学賞を受賞したことです。これは、私が日本の文化、日本人の心情に対する親近感を覚えた最初のきっかけでした。もう1つは高度成長期のまっただ中であつた日本経済が西ドイツを抜いて世界第2位に躍進したことです。これは私が日本経済の発展経験を勉強したくなったきっかけです。

川端文学で最初の作品を読んだのは『伊豆の踊子』でした。日本に来たばかりでしたので、先輩が翻訳したベトナム語版を読みましたが、他人に対する優しさや思いやりが描写され、感動的でした。その後、日本語原作も読んでみました。特に主人公の優しい高校生

(当時。現在は大学生に相当) のことについて踊子たちが「いい人はいいな」と言い合ったが、その表現がとても印象的でした。

日本は自然にめぐまれ、四季があり、季節によって美しさが違います。春は花(桜)、夏は海、秋は月や紅葉、冬は雪。川端はノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」の中で、美しい自然に感動し、友達を思うようになるといったことを書いていますが、日本人の優しさや思いやりは自然に関係があるかもしれません。

さて、次に日本経済と私について述べたいと思います。私にとって日本で経済学、特に開発経済学を勉強したことは意義が大きいと思います。日本は工業化の後発国として欧米先進国から近代技術・制度・ノウハウを導入しながら、欧米諸国への追い上げに成功しました。その成功の要因について日本内外の研究が多いが、私は日本の経験からベトナムなどの後発国にとって参考できる最も総合的要因は何かに関心をもってきました。そして、私はその総合的要因は「社会能力」という結論に辿りつきました。それは、社会を構成する政治家、官僚、経営者、知識人、労働者で、経済発展のために、それぞれにどのような資質が必要かと考えてみました。特に経済を直接に動かす政治家、官僚と経営者の資質について私は強い関心を持っていました。当然、政治家はリーダーシップ能力、官僚は行政管理能力、経営者は企業家精神・経営能力という資質が必要ですが、日本の場合それだけではなかった。政治家、官僚と経営者の共通な資質として深い教養と愛国精神を持っていました。特に日本の近代と発展にとって最も重要な明治時代と戦後の高度成長期においてそれらの資質を備えた指導者が非常に多かったのです。

時間の関係があるので、今回は、経営者の例だけを取り上げます。普通の経営者は利潤を追求する動機で企業家精神を発揮して製品やサービスを市場に供給する人たちですが、先進国に追い上げる過程の日本人経営者は国家の建設・発展への貢献という気概と責任感を強くもっていました。企業家精神(entrepreneurship)とは何か、日本の場合その内容は愛国主義・社会責任を含むと思います。明治時代と戦後復興・発展の代表的経営者はほとんどそのような起業家精神を持つ人たちでした。例えば、現在日本の代表的な会社の1つであるソニーは1946年に井深大と盛田昭夫が創立しましたが、創立記念式典での井深の演説を読み私はとても感動しました。彼は、「われわれは技術を使って祖国の復興に貢献しなければならない」と強く訴えたのです。終戦間もない1946年という時に、日本が戦争によるインフラや工場の破壊、溢れた失業者、ハイパーインフレ、食糧不足など社会が混乱する中で、指導的立場にある人の愛国心と責任感が社会全体を元気づけてその全エネルギーが復興・発展に注がれるようになったのだと思います。

さて、そのような背景で日本が近代化に成功し、欧米諸国にキャッチアップできました。正確に言いますと戦前にもいくつかの産業において欧米諸国に追い上げることができましたが、全体として欧米に肩並ぶことができたのは1950年代以降の高度成長期でした。高度成長期は日本経済が年平均で10%成長し、それが18年間続きました。その結果、日本が文

字通り西洋諸国にキャッチアップし、経済大国になったのです。ある研究者は「日本を変えた 6000 日間」と総括しました。

私が近年、発見した興味深いことは、現在のベトナム経済が日本の高度成長期前と比べ共通点が多いことです。人口も 9000 万人台、生産・輸出の構造や労働の配分も似通っています。ベトナムはドイモイ 30 年間の平均成長は 6.5%でしたが、高度成長期をまだ経験していないのです。これからベトナムに高度成長期が到来することを強く期待しています。今後 1~2 年、私は日本の高度成長期の発展要因を分析し、ベトナム語でまとめ、ベトナムが高度成長を実現するための条件を研究し、政府に提言したいと思っています。

最後になりますが、最近 1 つのことに気づいたのです。日本の方は日本からベトナムに行ったとき、ベトナムから日本に帰ると言います。同じように、ベトナムの方は日本に行って、ベトナムに帰ると言います。私の場合はどうかと言いますと、ベトナムに帰ると言いますし、またベトナムから日本にも帰ると言います。どちらも「帰る」という言葉を使うのです。ベトナムは故郷ですが、住まいは日本ですし、大学以降の教育・職業も日本です。私には 2 つの故郷があり、両国の文化を享受するという幸せを感じております。日本の皆さま、ベトナムの皆さまのおかげでこのような幸福が得られたことに改めて感謝しております。本日は誠にありがとうございました。（了）